

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

鹿児島県徳之島伊仙町

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003555">https://doi.org/10.15084/00003555</a>

# 鹿児島県徳之島伊仙町\*

加藤幹治

東京外国語大学大学院／日本学術振興会

## 1. 地域の概要

### 1.1 地理

奄美語徳之島方言は、奄美群島の徳之島で話される方言である。図1の地図は、左から日本列島・北琉球の島々・徳之島を示す。

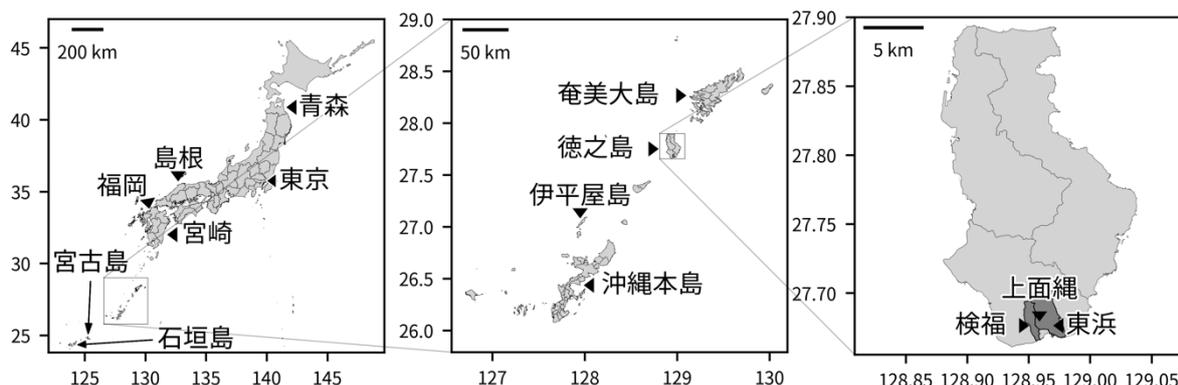


図1 日本列島・北琉球・徳之島の地図

徳之島は、北西の天城町、東側の徳之島町、そして南側の伊仙町に分かれる。そして、島内には数十の集落があるが、本稿では中でも伊仙町の3つの集落、東面縄/東浜（ひがしおもなわ、ひがしはま、徳之島方言で *agarebaa*）、上面縄（うえおもなわ、徳之島方言で *unnoo*）、そして検福（けんぶく、徳之島方言で *kinbuu*）の変種に注目する。

\* 本稿は、筆者が執筆した Kato, Kanji (forthcoming) Tokunoshima (Kagoshima, Northern Ryukyuan). In: Michinori Shimoji (ed.) *An Introduction to the Japonic languages: Grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages*. Ch2. Leiden: Brill. を日本語へ翻訳したものである。Kato (forthcoming) の執筆にあたっては、同書籍の執筆プロジェクトで選定された査読者からの査読を受けただけでなく、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」からの査読を受けた。有益なコメントをくださった匿名の査読者、そしてカルリノサルバトーレ氏と玉元孝治氏にお礼を申し上げる。また、徳之島方言を教えてくださいました徳之島の方々に感謝を申し上げる。本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」および JSPS 特別研究員奨励費 JP19J20370 の助成を受けている。

## 1.2 系統と分類

奄美語は、比較言語学的検討に基づいた研究によると、日琉語族・北琉球語派・奄美語に属する (Pellard 2015)。図 1 の 2 枚目の地図は、北琉球の言語 (奄美語, 国頭語, 沖縄語) が話される地域を示している。

しかし、奄美語の方言、そして徳之島の各集落の方言の比較言語学的検討に基づいた系統関係について論じた研究は存在しない。奄美語は、以下のように類型的な特徴に基づいた分類が行われている。上村 (1972) は北琉球の言語を 4 つに分類した: 喜界島, 大島徳之島, 沖えらぶ・北沖縄, そして南沖縄。上村 (ibid.) によると、徳之島方言は奄美大島, 加計呂麻島, 請島, 与路島の方言と共に「大島徳之島」群に属する。中本 (1990) は北は奄美大島から南は与論島までの方言を「奄美方言」とし、これを以下の 5 つに分類した: 北奄美大島, 南奄美大島, 徳之島, 北喜界島, そして南喜界島・沖永良部島・与論島。

徳之島方言もまた類型的な特徴に基づいた分類が行われている。平山他 (1966) は徳之島の方言を北と南の 2 群に分け、伊仙町の方言は南群に属するとした。崎村 (1983) は徳之島の方言を、北西, 東, 南の方言に分け、伊仙町の方言を南群に分類した。

伊仙町の方言の類型的な特徴および他の奄美語や他の徳之島の方言との相違については、平山他 (1966) に詳しい。

## 1.3 データ

本稿で扱うデータは特に断りのない限り筆者が 2017 年から 2020 年にかけて現地での聞き取り調査で、2020 年から 2022 年にかけて通信調査で得たものである。表 1 に調査協力者の一覧を示す。

表 1 話者情報

話者名もしくは ID (敬称略)	生年 (最後に調査を行った時点での年齢)	性別	集落
SO	1937 (71)	女	検福
琉清孝	1955 (66)	男	検福
YT	1935 (73)	女	検福
FA	1936 (84)	女	上面縄
SM	1929 (88)	男	上面縄
TS	1932 (85)	女	上面縄
TS	1930 (87)	男	上面縄
伊藤勝美	1932 (87)	男	東面縄

## 2. 音韻論

### 2.1 音素目録

徳之島方言の音素は、母音, わたり音, 子音の 3 種に分類できる。

徳之島方言には /a, i, u, e, o, i, ε/ の 7 つの母音がある。表 2 に母音の一覧を示す。

表2 母音

前舌	中舌	後舌	
i [i]	i [i]	u [u]	狭
e [e]		o [o]	中
ɛ [ɛ-ə]	a [ɒ]		広

(1)に、母音の違いによって対立する語を示す。

- (1) a. /mii/ 「実」, /mii/ 「穴」, /mæɛ/ 「前」, /maa/ 「間」, /muu/ 「藻」  
 b. /too/ 「蝸」, /tuu/ 「十」  
 c. /jan/ 「芋」, /jen/ 「縁」

後舌母音である /u/ と /o/ は, [+round] であって、調音の際に唇の突出も観察される。

徳之島亀津方言の /i/ は前寄りの中舌狭母音とされてきた (服部 1959: 284, 平山 1966: 31, 中本 1976: 112)。しかし、加藤 (2021) は, /i/ と /i/ は *F1* や *F2* ではなく *F3* によって区別されるとし、これらが前後ではない素性によって区別されることを示唆した。

/e/ の高さと前後も議論的となってきた。/e/ について、平山ほか (1966: 31) は前寄りの中舌広母音であるとし、柴田 (1981: 32) は中舌中央母音であるとした。これらの研究は筆者らの聴覚印象に基づくものである。音響分析の結果、/e/ は /e/ と同じ前舌中央母音であることが示唆された (加藤 2021)。これらは *F1*, *F2*, *F3* によっては区別することができないにも関わらず、話者には違う母音と認識されるため、他の何らかの音響特徴が弁別に関わっている可能性が示唆される。

わたり音には /j, jʰ, w, wʰ/ の4種類がある。これらの音色は母音に類似するが、モーラを構成しないという点で母音と異なる。

表3に子音の一覧を示す。

表3 子音

		両唇音	歯茎音	軟口蓋音	(声門音)
破裂音	無声音	p	t	k	
	有声音	b	d	g	
	喉頭化音		tʰ	kʰ	
摩擦音	無声音	s [s~ɕ]			h [ɸ~ç~x~χ~h]
	有声音	z [z~z~dz]			
破擦音			c [ts~tɕ]		
鼻音	非喉頭化音	m	n [n~ɲ~ŋ~ɳ]		
	喉頭化音	mʰ	nʰ		
はじき音		r [l~r]			

表4 無声歯茎音の破裂・破擦音系統の実現

	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/	/i/	/ɛ/
t	ta	ti	tu	te	to	ti~ti	tɛ
d	da	di	du	de	do	di~di	dɛ
c	N/A	N/A	tsu	N/A	N/A	tsi	N/A
tj	tea	tei	teu	tee	teo	tei~tei	N/A

## 2.2 音節構造

最大の音節構造は(C<sub>1</sub>)(G)V<sub>1</sub>(V<sub>2</sub>)(C<sub>2</sub>)である (C は子音, G はわたり音, V は母音を示す。カッコはそのスロットが必須でないことを示す)。喉頭化音は語頭の C<sub>1</sub> または G にのみ立つ。非喉頭化音は語内部での位置に関わらず C<sub>1</sub> に立つ。C<sub>2</sub> には語内部での位置に関わらず /n/ が立つ (撥音)。また, 語中では促音の一部として /p, t, k, s/ が C<sub>2</sub> に立つ。可能な音節構造のうち, CV が最も頻繁に観察される。超重音節の生起頻度は極めて少ないが, 不可能な構造ではなく, 付録のテキストでも *boon* という語が出現する。

### 2.2.1 削除規則

接辞や接語の添加によって異子音の連続 (e.g., /m/) や超重音節が生じることがあるが, これらは以下の (2) に示すような削除規則の対象になる。

- (2) a. C<sub>α</sub>C<sub>β</sub> という子音連続の C<sub>α</sub> を削除せよ (ただし, C<sub>α</sub> が /n/ の時を除く)。

/koowjuri/ → /koojuri/

- b. 形態素境界を含む V<sub>α</sub>V<sub>β</sub>C の V<sub>α</sub> を削除せよ

/kwaa-n.kja/ → /kwan.kja/

## 2.3 モーラ

V<sub>1</sub>, V<sub>2</sub>, そして C<sub>2</sub> はモーラを構成する。徳之島方言ではモーラが主要な音韻的ユニットとして機能する。例えば, §2.4 で述べる通り, アクセント付与の単位となる。また, 名詞は 2 モーラ以上の長さを持つ必要があるため, 基底で 1 モーラの名詞は単純語として出現する場合に母音が長音化される (e.g., /ki/ 「木」 → /kii/)。

## 2.4 アクセント

徳之島方言はピッチアクセントの体系を持ち, H と L の対立がある。名詞は三型アクセント体系であって, 語彙的に 3 つの型のうちどれか 1 つに所属する (平山ほか 1966)。(3) は同じ分節音によって構成される語が異なる音調型によって対立する例を示す。

- (3) a. A 型 vs. B 型: A 型 /kóó/HH 「川」      B 型 /kòó/LH 「皮」

b. A型 vs. C型: A型 /hási/ HH 「橋」 C型 /hási/ HL 「箸」

c. B型 vs. C型: B型 /kámí/ LH 「亀」 C型 /kámí/ HL 「瓶」

管見のかぎり、これまでの研究で (3) に示したような徳之島方言の音調のパタンを生み出す背後のメカニズムを明らかにした研究は存在せず、今後の検証が必要である。

名詞と異なり動詞は二型アクセントであって、語中の上り核の有無によって対立する。表 5 に二型の対立の様子を示す。

表 5 二型動詞アクセント

拍	グロス	<i>kir-</i> 「切る」	<i>kir-</i> 「着る」
1	INF	<i>kíri</i> LH	<i>kíri</i> HH
2	CAUS.INF	<i>kírásí</i> LLH	<i>kírásí</i> HHH

## 2.5 イントネーション

徳之島方言には少なくとも下降調と上昇調の 2 種類のイントネーションが存在する。疑問文は通常上昇調を伴って発話される。過不足のないイントネーション型の一覧と分類は今後の課題である。

## 3. 記述の単位

### 3.1 形態論の単位

ここでは語、接語、接辞という単位を導入する。語とは統語的にも音韻的にも独立した単位である。接語とは形態統語的には独立しているが、音韻的にはホストに従属する単位である。接辞とは形態論的にホストに従属し、常に語幹に接続する形態素である。ただし、ある形態素が環境によってホストに従属する場合と従属しない場合とがある。

### 3.2 品詞の分類

徳之島方言には名詞、動詞類、連体詞、助詞、副詞の 5 つの主要な品詞が認められる。名詞は名詞句の主要部となる語である。名詞は述部の項になるか、それ自体が名詞述語として述部になる。動詞類は述部の主要部となり、時制・ムード・態などで屈折する。動詞類には動詞語根からなる狭義の動詞と PC 語根からなる形容詞が含まれる。連体詞はいかなる助詞も伴わずに名詞句を修飾する語である。助詞は節や句に接続し、格、モダリティ、節同士の文法関係など様々な文法的機能を果たす。副詞は、上記のどの特徴にもあてはまらず、語や句を修飾する語である。

### 3.3 語根の分類

徳之島方言には名詞語根、動詞語根、PC 語根の 3 種の語根が認められる。名詞語根は接辞添加を伴わずにそのまま出現し、名詞としてはたらく（ただし、§4 で述べる通り、呼称名詞や一部の人称代名詞は数の標示を要求する）。動詞語根は必須の屈折接辞と随意的な派生接辞を伴って文中に出現する (§5.1)。PC 語根は、原則として動詞化接辞によって動詞語幹となった上で、動詞語根と同様の接辞をとって文中に出現する（中止形と連体形は例外である。詳細は§5.5.1 で述べる）。

## 4. 名詞

名詞とは、以下の基準を満たす語のことを言う。(i) 単独で節の述部になる(名詞述語, §8.2 参照)。(ii) 属格の =ga/=nu などの要素なしにそのまま他の語を修飾できない (§4.1 で述べる通り人称代名詞は例外である)。(iii) 格助詞やとりたて助詞が後続する。(iv) 独立した語である。

### 4.1 人称代名詞

徳之島方言の人称代名詞は人称(一人称と二人称)と数(単数, 双数, 複数)と尊卑性の観点から整理できる。他の琉球の言語では除括性(clusivity)の概念が人称代名詞の体系に必要であることもあるが、徳之島方言では除括性は問題にならない。三人称代名詞は存在せず、三人称名詞を参照するために指示詞が用いられる (§6.1 参照)。二人称では尊卑性によって形式が分類される。また、一人称ではハダカ形と無標形という形式が、一人称と二人称では融合形と非融合形という形式が区別される。これらの形式の形態統語的な機能については後述する。表 6 に人称代名詞の体系を整理する。

表 6 人称代名詞

	一人称	一人称ハダカ形	二人称尊敬	二人称非尊敬
単数非融合形	wan	wa	uri	ura
単数融合形	waa			uraa
双数	wattari/wanten		urinten	uranten
複数			uri-taa	ura-taa
複数	wakkja/waakja			ukkja

ハダカ形は一人称のみが有する形式である。ハダカ形は無標形とは異なり後続する助詞に関する強い選択制限がある。無標形にはほぼ全ての格助詞や取り立て助詞が後続できるのに対し、ハダカ形には主格/属格の =ga しか後続しない。融合形と非融合形には形態統語的な差異があり<sup>1</sup>、融合形が助詞を伴わずに主語になったり名詞を修飾したりする(e.g., waa kuma=nu tjootjoo 「私はこの町長だ」)のに対し、非融合形が主語や名詞修飾語としてはたらく場合には必ず助詞を伴う。

### 4.2 語彙的な名詞

語彙的な名詞は接辞添加や複合によって拡張される。名詞の構造は以下の通りである。

(接頭辞-) 語幹格 (-指大辞/指小辞) (-複数)

-ganasi は自然物や年上の親族名詞に接続する指大辞である(e.g., tida-ganasi 「太陽」, wuba-ganasi 「おば上」)。また、親族名称や職業の名詞が指大辞として用いられる(e.g., ziru-aka 「ジル姉さん」)にお

<sup>1</sup> 融合形の起源は、\*wa=ga > waa のように、非融合形に主格助詞 =ga や主題助詞 =ja が融合したものであると考える。なぜなら、融合形は主格助詞や主題助詞がついた名詞句と同じような統語的機能を持つからである。しかし、現時点では確かな歴史的証拠はなく、推論にすぎない。

ける *aka* 「姉」)。-*gwa* は愛着の対象に用いられる指小辞である (e.g., *kwaa-gwa* 「子供」) が、特に愛着の対象ではない無生物に付いて美化語として用いられる場合もある (e.g., *tjaa-gwa* 「お茶」)。複数接辞には -*taa* と -*nkja* の 2 種類がある。-*taa* は人間名詞または人間を参照する指示詞につく。人称代名詞では双数形が存在したが、名詞の接辞としては双数を標示するものではなく、人数が 2 人であることを示す場合には数詞を用いて *taroo=tu ziroo t'aari* (PN=COM PN 2 人) 「太郎と二郎の 2 人」のように表す。

語彙的な名詞は呼称名詞と非呼称名詞の 2 種類に分けられる。前者はそれによって呼びかけを行うことのできる名詞で、固有名詞・親族名称や一部の職業の名詞が含まれる。例えば、(4)における *ama* 「母」は、それによって聞き手に呼びかけを行っているため、呼称名詞に分類される。

- (4)     *amama*           *kiiga*  
           *ama=ma*       *ki-i=ga*  
           母=ADD        来る-INF=Q  
           「お母さんも来るの？」

呼称名詞には数の標示が義務的であって、標示がない場合には必ず単数であると解釈される。

### 4.3 数詞と連体詞

#### 4.3.1 数詞

徳之島方言の数詞には、単独で語としてはたらくもの (基数詞, 度数詞, 人数詞) と名詞に接続する接頭辞がある。数詞の一覧を表 7 にあげる。表の中で括弧に入れられているものは漢語である。

数える対象のない数学的な概念としての数には漢語が用いられる。基数詞は人間以外の名詞を数えるのに用いる (e.g., *usi taac'i mutjun* (牛 2 つ持っている) 「牛を 2 頭持っている」)。度数詞はものごとの回数を数えるのに用いる (e.g., *uri tjukeeri=du sjan* (それ 2 回=FOC した) 「それを 2 回だけした」)。人数詞は人の数を数えるのに用いる (e.g., *t'aari=si ika* (2 人=INS 行く .HORT) 「2 人で行こう」)。数接頭辞は無生物名詞につき、数を表す (e.g., *t'ju-uban* 「一晚」)。

表7 数詞の一覧

数	基数詞	人数詞	度数詞	接頭辞
1	<i>t'in</i>	<i>t'jukeeri</i>	<i>t'juuri</i>	<i>t'ju-</i>
2	<i>t'aaci</i>	<i>t'akeeri</i>	<i>t'aari</i>	<i>t'a-</i>
3	<i>miici</i>	<i>mikeeri</i>	<i>mitjaari</i>	<i>mi-</i>
4	<i>juuci</i>	<i>jukeeri</i>	<i>jutaari</i>	<i>ju-</i>
5	<i>icici</i>	<i>itjukeeri</i>	( <i>gonin</i> )	<i>ici</i>
6	<i>muuci</i>	( <i>rokkai</i> )	( <i>rokunin</i> )	<i>mu-</i>
7	<i>nanaci</i>	( <i>nanakai</i> )	( <i>nananin/sitjinin</i> )	<i>nana-</i>
8	<i>jaaci</i>	( <i>hatjikai</i> )	( <i>hatjinin</i> )	<i>ja-</i>
9	<i>kuunuci</i>	( <i>kjuukai</i> )	( <i>kjuumin</i> )	( <i>kjuu-</i> )
10	<i>tuu</i>	( <i>zjukai</i> )	( <i>zjuumin</i> )	( <i>zjuu-</i> )

## 5. 動詞類

動詞類には狭義の動詞と形容詞が含まれる。動詞語根からなるものを動詞，PC 語根からなるものを形容詞と呼ぶ。動詞語根と PC 語根は活用や述部の構成の仕方という点で形態統語的に異なる振る舞いをする。以下では、これらについて述べる。

### 5.1 動詞

動詞は、語幹核に随意的な派生接辞と必須の屈折接辞が接続して構成される。語幹核とは下地 (2018: 192-193) が提唱した概念で、語幹を構成する最小単位をいう。語幹核は単独の動詞語根から成る場合、複合語幹から成る場合、そして PC 語根と派生接辞から成る場合がある。以下に複数の形態素からなる語幹核を[]に入れて示す。[*ut-i+hugas*]-i (打つ-INF+掘る-INF) 「穴を掘る」、[*naga-mir*]-i (長い-VBLZ-INF) 「長くする」。

### 5.2 屈折形態論

動詞には必須の屈折接辞が1つ要求される。動詞の各屈折形式は統語的な機能によって定動詞類・副動詞類・中止形・分詞形・連用形に分類される。表8に屈折接辞の一覧を示す。表8の形式は *koow* 「食べる」で代表させる。表9は各タイプの分類基準となる統語的な機能を示している。

表 8 屈折接辞の一覧

接辞	形式	名称	タイプ
-a	koow-a	勧誘	定動詞
-ee	koow-ee	命令	定動詞
-u	koow-jur-u <sup>2</sup>	焦点呼応	定動詞
-una	koow-una	禁止	定動詞
-oo	koow-oo	意志	定動詞
-i	koow-i	命令	定動詞
-i	koow-i	連用	連用
-taari	koow-taari	並置	副動詞
-taatu	koow-taatu	展開	副動詞
-ma	koow-ar-ma <sup>3</sup>	否定条件	副動詞
-nba	koow-ar-nba <sup>4</sup>	否定条件	副動詞
-n	koow-jur-n <sup>4</sup>	分詞	分詞
-ti	koow-ti	中止	中止

表 9 屈折タイプの統語論

	定動詞	中止	副動詞	分詞	連用
主節の述語になる	✓	✓	-	✓	✓
副詞節を形成する	-	✓	✓	-	✓
名詞を修飾する	-	-	-	✓	-
名詞として機能する	-	-	-	✓	✓

### 5.3 派生形態論

語幹核と屈折接辞の間には派生接辞が含まれる。表 10 に派生接辞の承接関係を示す。各接辞の詳細な機能は§9 で述べる。

表 10 派生接辞の承接関係

語幹核	態		時制・相・極性		屈折
	-as- 使役	-ar- 受身・可能	-tur- 非完結	-ar- 否定	
			-adar-(-tar-/-ti) <sup>5</sup> 否定過去	-tar- 過去	
			-jur- 非過去		

<sup>2</sup> -u は語幹核に直接後続できず、-jur- (NPST), -tar- (PST), -tur- (PROG) のいずれかを直前に要求する。

<sup>3</sup> -ma (NEG.COND) と -nba (NEG.COND) は語幹核に直接後続できず、-ar- (NEG) を直前に要求する。

<sup>4</sup> -n は語幹核に直接後続できず、-jur- (NPST), -tar- (PST), -tur- (PROG) のいずれかを直前に要求する。

<sup>5</sup> 括弧は、-adar- (NEG.PST) には -tar- (PST) か -ti (SEQ) のどちらかが必ず後続することを示す。

否定過去 *-adar-* は進行 *-tur-* や否定 *-ar-* とは共起しない。過去接辞の *-tar-* は否定接辞の *-ar-* とは共起しない。また、非過去接辞の *-jur-* は進行 *-tur-*、否定 *-ar-*、否定過去 *-adar-*、過去 *-tar-* とは共起しない。屈折接辞分詞形の *-n* は語幹核に直接接続することができず、表 10 中の「時制・相・極性」のスロットのいずれかの派生接辞に後続する。態の *-ar-* は表中では PASS（受動）と示されているが、可能態を標示することもある。*-jur-* は非過去・肯定・非進行の環境で現れる<sup>6</sup>。

ここまでで導入された動詞の接辞のうち、*ŋ* から始まるもの（過去 *-tar-*、進行 *-tur-*、中止 *-ti*、並置 *-taari*、展開 *-taatu*）と連用形の *-i* は、接続する語幹末の分節音によって形態音韻規則を適用される（e.g., *jum-tur-n*（読む-PROG-PTCP）は *m-t/* という連続が */d/* になり、*judun* として実現される）。*ŋ* から始まる接辞の規則を (5) に、連用形接辞の規則を (6) に示す。

- (5) a. */b, m/* に接続する接辞の初めの *ŋ* を */d/* にし、語幹末の */b, m/* を削除する。  
 b. */k, s, t, j/* に接続する接辞の初めの *ŋ* を */tj/* にし、語幹末の */k, s, t, j/* を削除する。  
 c. */g, n/* に接続する接辞の初めの *ŋ* を */zj/* にし、語幹末の */g, n/* を削除する。  
 d. *ŋ* から始まる接辞の前の */r, w/* を削除する。

- (6) 連用形の *-i* の前の *ŋ* を */tj/* にする。

## 5.4 存在動詞・結果動詞・コピュラ

### 5.4.1 存在動詞

徳之島方言の存在動詞には、有生存在動詞 *wur-*、無生存在動詞 *ar-*、存在否定動詞 *neer-* の 3 種類がある。以下で述べる通り、存在動詞は、形態論、有生性の選択、否定の方略、補助動詞としての使用という 4 つの点で通常の語彙的な動詞と異なる。

まず、§5.3 で分詞形接辞の *-n* が語幹核には直接接続できないと述べたが、存在動詞はその例外であり、*-n* が存在動詞語幹に直接接続できる（e.g., *ar-n*）。

次に、存在動詞の主語は有生性に制限がある。*wur-* は有生物のみを主語として取れる一方で、*ar-* と *neer-* は無生物のみを主語とすることができる。本稿の付録テキストの (01) にこの制限がよく現れている。すなわち、(01) 中に 2 回現れる *ar-* の主語 *atama* 「頭」、*wanrjoku* 「腕力」はどちらも無生物であり、(01) の *wur-* の主語は *samurai* 「侍」は有生物である。

3 点目に挙げられるのが、無生の存在動詞 *ar-* は通常の語彙的な動詞と否定の方略が異なるという点である。通常の動詞や有生の存在動詞 *wur-* は語幹に否定派生接辞の *-ar-* を接続することで否定を標示するが、*ar-* には否定接辞は後続せず、代わりに否定の存在動詞 *neer-* が用いられる（cf. *kuma=nin=ja wur-ar-n* 「ここにはいない」 vs. *kuma=nin=ja neer-n/neer-ar-n'* 「ここにはない」）。ただし、*ar-* に否定接

<sup>6</sup> *-jur-* が *-n* と *-u* 以外の接辞の前にある時（e.g., *jum-ar-jur-i*（読む-PASS-NPST-ING））、その *-jur-* は義務的に要求されているわけではなく、どのような機能を果たしているか不明である。このような随意的な *-jur-* の機能は今後の課題である。

<sup>7</sup> *neer-* に否定接辞 *-ar-* が後続しない場合とする場合とがあるが、いずれでも存在の否定を表し、否定接辞 *-ar-* が後続しても二重否定にはならない。

辞 *-ar-* が接続した形式 *aran/anan*<sup>8</sup> も出現することがある。この *aran/anan*<sup>8</sup> という形式は存在動詞ではなく否定の補助動詞として用いられ、両肢述語において否定を標示したり (e.g., *nii aran* 「煮ない」)<sup>9</sup> コピュラ *jar-* の補充形として用いられたりする (コピュラの補充形は §5.4.2 で述べる)。*neer-* と *ar-* の両方が名詞述語で用いられ (cf. (8c,d)), また *neer-* は名詞述語において否定のコピュラとしても用いられる。

最後に、*ar-* と *neer-* には以下のような両肢述語構造における特殊な用法がある。結果相を示す補助動詞や (7a), 軽動詞構文の述部を構成する要素 (7b) として用いられる。そして、*neer-* はそれらの否定形として用いられる。*neer-* は形容詞の否定にも用いられる。

- (7) a. *kabinu*      *tudi*      *an*  
           *kabi=nu*      *tub-ti*      *ar-n*  
           紙=NOM      飛ぶ-SEQ      RSL-PTCP  
           「紙が飛んでしまった」
- b. *an*    *tjuja*    *kjurakuma*      *an*  
       *an*    *tju=ja*    *kjura-ku=ma*      *ar-n*  
       あの 人=TOP きれい-SEQ=ADD      STA-PTCP  
       「あの人は綺麗でもある」

#### 5.4.2 コピュラ

コピュラ動詞 *jar-* は名詞述語文の述部に現れる。非過去肯定文ではコピュラは現れず (8a), 過去の肯定文 (8b) では *jar-* が現れる。また, §5.4.1 で触れた通り, 否定文では *ar-* と否定接辞 (8c) や *neer-* (8d) が用いられる。

- (8) a. *wan.ja*<sup>10</sup>      *sinsii*  
           *wan=ja*      *sinsii*  
           1SG=TOP      先生  
           「私は先生だ」
- b. *wan.ja*      *sinsii*    *jatan*  
           *wan=ja*      *sinsii*    *jar-tar-n*  
           1SG=TOP      先生    COP-PST-PTCP  
           「私は先生だった」
- c. *wan.ja*      *sinsii*    *aran*  
           *wan=ja*      *sinsii*    *ar-ar-n*

<sup>8</sup> *anan* は *aran* の自由変異形である。

<sup>9</sup> §9.5 で述べるとおり, 否定接辞を用いる否定と否定補助動詞を用いる否定の機能の差異は明らかでない。

<sup>10</sup> 音韻表記におけるドットは音節境界を表し, 専ら V.nGV と Vn.GV の区別のために用いる。

1SG=TOP 先生 COP-NEG-PTCP

「私は先生ではない」

- d. *wan.ja*            *sinsijja*            *nen*  
 wan=ja            sinsii=ja            neer-n  
 1SG=TOP            先生=TOP            NEG-PSCP  
 「私は先生ではない」

## 5.5 形容詞

形容詞は主に人や事物の性質，色，状態などを表す語類で，主に節の述部として機能する。§5.5.2で触れる「形容詞的な語」として *-na* で終わる形式がある（e.g., *teegee-na* 「大変な」）が，数が少ないため生産的な形態法かどうか不明であり<sup>11</sup>，これ以降では「形容詞」はPC語根から派生する語のみを指すこととする。

### 5.5.1 屈折する形容詞

徳之島方言における形容詞は，PC語根を中心に形成される語類であり，動詞類のサブクラスである。形容詞を形成する方法は2種類あり，(9a)は動詞化接辞によって動詞語幹を派生し，動詞と同様の屈折をするもの，(9b)は動詞にはない屈折接辞 *-ku* または *-ka* が語幹核に直接接続するものを示している<sup>12</sup>。

- (9) a. *kjura*            *-har*            *-tar*    *-n*  
 綺麗            -VBLZ            -PST    PTCP  
 [[[Adj. root]sc -VBLZ]s            -Drv.    -Infl.]Adj  
 「綺麗だった」
- b. *kimu*            +*kjura*            *-ku*  
 心            +綺麗            -SEQ  
 [[[Noun +Adj. root]sc]s            -Infl.]Adj  
 「心が綺麗な様子で（ふるまう）」

前者の語幹，すなわち *-har-* によって形成された動詞語幹は，動詞語根から成る動詞語幹と同様の派生・屈折接辞を取る（ただし，*-har-* それ自体は動詞語根からなる語幹には接続しない）。一方で，*-ku* で屈折する形式は，そもそも派生接辞を取ることができず，*-ku* という接辞も動詞語幹には接続し

<sup>11</sup> いくつかの本土方言では *-na* 添加が生産的である（e.g., 東京方言の「急-な」）ので，徳之島方言で *-na* を有する形式は本土方言からの借用である可能性がある。

<sup>12</sup> (9)に使われている略語のうち，小型大文字でないものは以下の通り：Adj（形容詞），SC（語幹核），S（語幹），Drv（派生接辞），Infl（屈折接辞）。

ない。この節では、*-har-*によって形成された語幹と動詞語根から成る語幹の共通点と相違点、そして *-ku* や *-ka* で屈折する形式の形態統語論について述べる。

(9a) のように PC 語根と動詞化接辞によって形成される語幹は、動詞語根から成る動詞と以下のような共通点を持つ。まず、語幹核が接辞添加の最小の単位となる。次に、態や時制の派生接辞が語幹に随意的に接続する。そして、屈折接辞が必ず一つ要求される。一方で、動詞語幹から成る動詞との相違点は以下の通りである。まず、形容詞の形成には動詞化接辞<sup>13</sup>が必要であるが、動詞語根には動詞化接辞は接続しない。次に、*-har-* から成る語幹は文末助詞の *=sa* が後続する場合、例外的に屈折接辞を伴わずに文中に出現できる。また、形容詞語幹に接続できる屈折接辞は、意志 *-oo*、中止 *-ti*、分詞 *-n*、連用 *-i* のみである。最後に、動詞と異なり否定派生接辞 *-ar-* を取ることができず、否定は *-ku* 形（次の段落で述べる）と否定存在動詞 *neer-* の両肢述語構造で行われる。

形容詞の屈折接辞には、*-ka*（連体形）と *-ku*（中止形）という専用の形式が存在する。*-ku* は副詞節を形成するが主節は形成しないという点で動詞の屈折接辞（表 9）の副動詞類に類似する。しかし、以下のような副動詞類にない特徴ももつ。まず、*-ku* 形は *ar-* (cf. (7b)), *nar-*, *s-* といった軽動詞と共に形動詞構文を形成する。加えて、*-ku* 形と否定存在動詞 *neer-* が両肢述語を形成することで形容詞が否定される。*-ka* 形は専ら名詞修飾語としてのみ機能し (e.g., *gunja-ka humi* (小さい-ADNLZ 船)「小さい船」), 述部にはたたない。

## 5.5.2 典型的でない形容詞的な語

*-na* が副詞や名詞に後続することで名詞修飾語として機能することがある (*rippa-na ningin* (立派-ADNLZ 人間)「立派な人間」)。この形式は専ら名詞修飾語としてのみ機能し、述部にはたたない。筆者のデータでは、*-na* が後続する形式は限られた語例しか得られていない。

## 6. 指示詞と疑問詞

### 6.1 指示詞

徳之島方言の指示詞は3系列あり、それぞれが固有の分節音から始まる。すなわち、*/k/* から始まる近称、*/u/* から始まる中称、*/a/* から始まる遠称の3系列がある。表 11 に指示詞の一覧を示す。

<sup>13</sup> これまでに、動詞化接辞として *-har-* と *-mir-* の2つの形式が確認されている。前者は自動詞語幹、後者は他動詞語幹を派生する。前者の方が後者に比べて極めて頻繁に観察される。

表 11 代名詞の一覧

品詞	機能	形式		
		近称	中称	遠称
名詞	代名詞	<i>kuri</i> (これ)	<i>uri</i> (それ)	<i>ari</i> (あれ)
名詞	場所	<i>kuma</i> (ここ)	<i>uma</i> (そこ)	<i>ama</i> (あそこ)
名詞	連体詞	<i>kun</i> (この)	<i>un</i> (その)	<i>an</i> (あの)
名詞, 副詞	方向	<i>kan</i> (あっち)	<i>ugan</i> (そっち)	<i>agan</i> (こっち)
動詞	様態	<i>kassi</i> <sup>14</sup> (こうする)	<i>ussi</i> (そうする)	<i>assi</i> (ああする)
動詞, 副詞	様態	-	<i>ug(w)asi</i> (そうする)	<i>agasi</i> (ああする)
動詞	様態	<i>kassan</i> (こうする)	<i>ugasan</i> (そうする)	<i>agasan</i> (ああする)

指示詞には直示用法と照応用法とがある。直示用法においては、話し手、聞き手、指示対象の心理的・物理的距離によって3系列のうちいずれが選択されるかが決まる。

遠称と近称の指示詞を並置することによって、「色々な、たくさんの」を意味する定型句が形成される。(10)では*ari*と*kuri*の並置が「あれこれ、色々なことを」を意味している。

- (10) *ari*    *kuri*    *jun*  
*ari*    *kuri*    *iw-jur-n*  
あれ    これ    言う-NPST-PTCP  
「あれこれと言う」

筆者は今までに *ari kuri*, *ama kuma* 「あちらこちら」, *assi kaasi* 「色々な方法で」の3種類の並置を確認している。

### 6.1.1 指示代名詞

徳之島方言には三人称の代名詞がなく、三人称名詞の指示には指示代名詞 (*ari*, *kuri*, *uri*) か指示連体詞 (*an*, *kun*, *un*) が用いられる。これらの指示詞は有生性に限らずどのような名詞でも指示できるが、指示対象が複数である場合、その有生性によって異なる複数接辞が選択される。指示対象が人間名詞の場合 *-taa* (e.g., 知人を指して *kuri-taa* 「この人たち」) が、指示対象が非人間名詞の場合 *-nkja* が (e.g., 車を指して *kuri-nkja* 「この車 (複数)」) 選択される。

図2に、異なる場面における指示詞代名詞の使用を調査するために用いた絵を示す<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> 様態指示詞は指示語基と軽動詞 *s-* からなるとも考えられるが、これらの活用形を明確に形態素へ分析できないため、本稿ではこれら进行分析せず1形態素とする。

<sup>15</sup> 画像は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」で作成された調査票「*demonstratives\_ninjal20170413.xlsx*」から引用した。

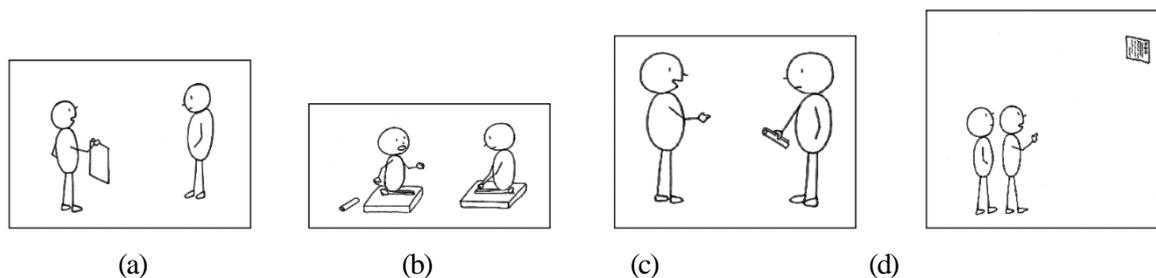


図2 直示用法の場面

図2では、口を開けている人物がもうひとりの人物に対して「指示対象を見ろ」と言う様子が描かれている。近称の *kuri* は、指示対象が話し手の方により近い2 (a)と2 (b)のような場面に対して用いられる。中称の *uri* は、指示対象が聞き手の方により近い2 (c)のような場面に対して用いられる。遠称の *ari* は、指示対象が話し手と聞き手のどちらからも遠い2 (d)のような場面に対して用いられる。*uri* の照応用法では、付録テキストの (04) のように、主に不定の対象が指示される。このような用法で *uri* と *kuri* が可換かは不明である。*ari* は照応用法において (11) のように定の対象を指示する。

- (11) *kiinu kootan ari mutji tjii*  
*kiinu koow-tar-n ari mut-ti tjii*  
 昨日 買う-PST-PTCP あれ 持つ-SEQ 来る.IMP  
 「昨日買ったあれを持って来い」

### 6.1.2 指示場所名詞

指示場所名詞は、形態統語的に通常の語彙的な名詞と同様に機能する。指示代名詞と同様に、話し手に近い場所は近称で、聞き手に近い場所は中称で、どちらからも遠い場所は遠称で指示される。

### 6.1.3 指示連体詞

指示連体詞は、主に名詞修飾語として機能するが、名詞の主要部としても機能する。

### 6.1.4 方向指示詞

方向指示詞は副詞として機能し、方向を示す。また、名詞としても働き、「こちら/そちら/あちら」を示す。

### 6.1.5 様態指示詞

様態指示詞は動詞であるが、節の述語になることは稀で、主に分詞形で名詞を修飾する。*ug(w)asi* はフィラー、聞き手への同意を示す相槌、話題の転換をしめす標識としても用いられる。

## 6.2 疑問詞と不定詞

疑問詞は7種類ある。一覧を以下に示す：*taru/tan*「誰」，*nuu*「何」，*daa*「どこ」，*din*「どっち」，*ici*「いつ」，*ikuci*「いくつ」，*ikjasi*「どんな風だ」。

疑問詞は格助詞が後続し述語の項になりうるという点で名詞として機能する。ただし、属格や連体修飾構造による修飾はされない。*tan*，*taru*，*nuu*は反復されて*tandaru*，*tarudaru*，*nuunu*という形式をとり、疑問の対象が複数であることを含意する（e.g., *tarudaru=nu kiiga*「誰たちが来るの？」）。*ici*と*ikuci*は名詞としても副詞としても機能する。*ikjasi*は分詞形で名詞を修飾し（e.g., *ikjasjun mun kootanga*「どんなものを買ったか」），中止形で文を修飾する（e.g., *ikjasi izjanga*「どうやって行ったのか」）。疑問詞は疑問文中において対応する平叙文の対応する語と同じ位置に現れる。

## 7. 名詞句

### 7.1 主要部

様々な名詞が修飾部を欠いたまま名詞句の主要部になりうる。しかし、文法化された形式名詞は常に修飾部を必要とする。例えば、*uki*「時」が文法化した*duki*という形式名詞は常に動詞の分詞形によって修飾され、「～する時」という句を作る。

また、主要部を欠く名詞句も存在する。(12)は主要部を欠く名詞句の例である。

(12)	<i>mεε</i>	<i>katjan</i>	<i>mutji</i>	<i>tjii</i>
	<i>mεε</i>	<i>kak-tar-n</i>	<i>mut-ti</i>	<i>tjii</i>
	前	書く -PST-PTCP	持つ-SEQ	来る.IMP
	「前に書いたのを持ってこい」			

(12)では*mεε katjan*が「前に書いたもの」を表す主要部を欠く名詞句として機能している。

### 7.2 修飾部

動詞の分詞形、形容詞の連体形、連体指示詞、そして属格名詞句の4つが名詞句に先行し、名詞句を修飾する（e.g., *akk-jur-n tju*（歩く-NPST-PTCP 人）「歩く人」，*jaa=nu mεε*（家=GEN 前）「庭」）。ただし、§9.3で述べる通り、属格助詞を伴わずに修飾部として機能する名詞もある。

### 7.3 格

表12に格助詞の一覧と用例を示す。用例中で当該の格助詞が附属する箇所を角括弧で示す。

表 12 格

名称	形式	機能	例	訳
主格	=ga, =nu/=no	主語	wunagu=ga akkjun	女性が歩く
属格	=ga, =nu/=no	名詞句の修飾	wan=nu hun	私の本
対格	なし			
与格	=nin, =n, =nen, =nin	間接目的語 時間・場所 ゴール 使役・受け身の主語	uttu=nen hun turatjam sanzi=nen tjan jakuba=nin izi azja=nin utatan	弟に本をあげた 三時に来た 役場に行く 父に殴られた
処格	=nan, =nanti	場所	jaa=nan wun	家にいる
方向格	=ka, =katji	移動の方向	un=katji izi	海に行く
具格	=si	動作の手段	mizi=si aroi	水で洗う
共同格	=tu	名詞句の並置	taroo=tu ziroo	太郎と二郎
比較格	=juri, =juka	比較の対象	azja=ja ama=juri=ma uutun	父は母より年上だ
奪格	=kara, =kaa	動作や比較の起点	tookjoo=kara tjan	東京から来た
限界格	=ntee	動作や概念の限界	atja=ntee san	明日までしない

=ga と =nu/=no<sup>16</sup>は、附属する語の有生性および主格と属格のどちらで用いられるかによって交替する。表 13 に交替のパターンを示す。表中では G が =ga, N が =nu/=no を表す。

表 13 =ga と =nu/=no の交替

	人称代名詞	固有名詞 (人間)	人間名詞一般	非人間名詞
主格	G	G	G/N	N
属格	G	G/N	G/N	N

格助詞は基本的に固有のアクセント情報を持たず、附属する語のアクセント型によって実現が変わる。しかし、助詞が連続した場合などに固有のアクセントを持つ場合がある。例えば、=juri=ma という連続は常に LLL で実現する。個々の助詞の音韻的自立性の検証は今後の課題である。

## 7.4 述部

§5 では 1 つの語幹核から成る動詞類について述べた。本節では、2 つ以上の語幹核から成る述部について述べる。すなわち、軽動詞構文、複合動詞、補助動詞構文、名詞述語文について述べる。

## 7.5 動詞類による述部

### 7.5.1 軽動詞構文

軽動詞構文は V<sub>1</sub> (語彙的な主動詞) と V<sub>2</sub> (軽動詞) で構成される。ar-, nar-, s-, neer- が V<sub>2</sub> として機能する。軽動詞構文は、主動詞に助詞が後続する時 (e.g., (13a) において jum-i に累加助詞 =ma が

<sup>16</sup> =no は =nu の異形態である。=no は琉球諸語に広く分布しているわけではなく、本土方言からの借用であると考えられる。

後続する時) や、談話中で既に言及された動詞に再度言及する時 (e.g., (13b) において、第1文で言及された *ik-*「行く」が第2文の軽動詞構文では軽動詞に置き換えられている)

- (13) a. *jumima san hun koouna*  
*jum-i=ma s-ar-n hun koow-una*  
 読む-INF=ADD する-NEG-PTCP 本 買う-PROH  
 「読みもしない本を買うな」
- b. *gakkoonen ikjun munma mukasija akki*  
*gakkoo=nen ik-jur-n mun=ma mukasi=ja akk-i*  
 学校=DAT 行く-NPST-PTCP FN=ADD 昔=TOP 歩き-INF  
  
*jatan | attji sjan*  
*jar-tar-n | akk-ti s-tar-n*  
 COP-PST-PTCP | 歩く-SEQ する-PST-PTCP  
 「学校に行くのも昔は歩きだった。歩いてした (i.e., 歩いて行った)」

## 7.5.2 複合動詞

複合動詞は、2つの動詞語根を中心に1つの動詞語幹核が形成されたものである。複合動詞の前部要素は動詞の連用形である。前部要素と後部要素の結びつきの強さは場合によって異なり、前部要素にある程度自由に接辞添加を許すもの ((14a) で述部の複合動詞に受動の *-ar-* が挿入されている) から、接辞添加を許さないもの (14b) までである。

- (14) a. *nengazjooga kubararihazimiti*  
 <nengazjoo>=ga kubar-ar-i+hazimir-ti  
 年賀状=NOM 配る-PASS-INF-始める-SEQ  
 「年賀状が配られ始めた」
- b. *\*utarihugasi*  
 ut-ar-i+hugas-i  
 打つ-PASS-INF+掘る-INF

## 7.5.3 補助動詞構文

補助動詞構文では、動詞の中止形と補助動詞が1つの述部を形成する。補助動詞には、*ar-*「ある」、*uk-*「おく」、*nj-*「見る」、*k-*「来る」、*neer-*「ない」、*kurir*「くれる」などがある。

## 7.6 名詞述語文

名詞述語文では、名詞もしくは動詞の連用形がコピュラ動詞とともに述部を形成する (cf. (8))。非過去肯定文では名詞がコピュラ動詞を伴わずに述部となるが、他の環境ではコピュラ動詞か存在動詞が現れる。後部にどのような動詞が現れるかは§5.4.2を参照のこと。

## 8. 単文

### 8.1.1 文タイプ (平叙文, 疑問文, 命令文)

文タイプは何かを叙述する文と何かを要求する文に大別でき、前者を平叙文と呼ぶ。後者には疑問文<sup>17</sup>、命令文、勧誘文が含まれる。

単文における基本語順は

主語 – 間接目的語 – 直接目的語 – 述部

である。談話中では (15) のようにこの基本語順に従わない文も存在する。(15) では主語の *wan=ja* が述部の *ikjun waki=joo* に後続している。

- (15) *hosjuuzjugjootji*      *jitijjaa*      *ikjun*      *wakijoo*  
 <hosjuuzjugjoo>=tji      jiw-ti=jaa      ik-jur-n      waki-joo  
 補習授業=QUOT      言う-SEQ=CFP      行く-NPST-PTCP      FN=CFP  
*benkjoo*      *sigatji*      *jitji*      *wan.ja*  
 <benkjoo>      s-i=ga=tji      jiw-ti      wan=ja  
 勉強      する-INF=PUR-QUOT      言う-SEQ      1SG=TOP  
 「補習授業と行って行くわけだよ、「勉強しに」と言って、私は」

### 8.1.2 平叙文

動詞の屈折形のうち、以下の 4 つが平叙文を形成する：分詞形 *-n*、中止形 *-ti*、連用形 *-i*、意志形 *-oo*。(16) では、連用形が述部を構成する例 (16a) と中止形が述部を構成する例 (16b) を示している。

- (16) a. *kumanan*      *wuri*  
          *kuma=nan*      *wur-i*  
          ここ=DAT      EXT-INF  
          「ここにいる」  
 b. *umanan*      *wuti*

<sup>17</sup> 疑問文は疑問に答えることを要求する文であると考えられる。

uma=nan          wur-ti  
 そこ=DAT        EXT-SEQ  
 「そこにいた」

### 8.1.3 疑問文

疑問文では、述部が=*ga* または=*see*によって標示される。疑問詞は、その疑問文と対応する平叙文中の対応する語と同じ位置に現れる。すなわち、主語が疑問の対象となる場合は文頭に、副詞や目的語が疑問の対象になる場合には動詞の前に置かれる。

### 8.1.4 命令文と勧誘文

命令文は述部の動詞屈折接辞 *-ee* もしくは *-i*によって標示される。勧誘文は屈折接辞 *-a*によって標示される。

## 8.2 格配列

徳之島方言は有標主格型の格配列であり、自動詞と他動詞の主語が主格助詞によって標示され、他動詞の目的語は標示を受けない。§7.3 で述べたように、主格助詞の=*ga* と=*nu* は主語の有生性によって交替する。稀に、天候、存在・出現を表す文で主語が無標示となることもある。エリシテーションによって主語が無標示である文を引き出すことは困難であって、どのような環境で主語が無標示である文が出現するかは今後の課題である。また、他動性が低い述語、例えば知覚動詞、可能動詞、存在動詞などでは、(17)のように主語が与格で標示される。

(17) *wannin.ja          saaran*  
*wan=nin=ja        s-ar-ar-n*  
 1SG=DAT=TOP    DO-POT-NEG-PTCP  
 「私にはできない」

## 8.3 所有表現

所有表現には、「私の家」に相当するような句の所有表現と、「私はこれを持っている」に相当するような述語での所有表現がある。

句の所有表現では、所有者名詞と属格助詞によって被所有名詞を修飾するか、あるいは属格なしに所有者名詞が被所有名詞を修飾する。人称代名詞以外の名詞は、属格助詞とともに被所有名詞を修飾する (e.g., *maju=nu mi* (猫=GEN 目)「猫の目」)。

人称代名詞には属格助詞なしで被所有名詞を修飾できるものとできないものがある。表6中の16個の人称代名詞のうち、一人称単数非融合形の *wan* は句の所有表現には用いられない。他の非融合形とその複数形、すなわち *uri*, *ura*, *uri-taa*, *ura-taa* は属格助詞を伴って被所有名詞を修飾する (e.g.,

*ura=ga jaa* 「あなたの家」)。融合形と *-kja* で終わる複数形は属格助詞なしに被所有名詞を修飾する (e.g. *wakkja azja* 「私達の祖父」)。双数形はこれまでに所有表現で使われた形式を確認していない。

述語による所有表現には、与格と存在動詞によるものと、語彙的な動詞を用いたものがある。与格による所有表現は、(18a)に示すように、主語の被所有者、与格の所有者、存在動詞で構成される。語彙的な動詞による所有表現は、(18b)に示すように、主語の所有者、目的語の被所有者、語彙的な動詞で構成される。

- (18) a. *wannin.ja kaninu nen*  
*wan=nin=ja kani=nu neer-n*  
 1SG=DAT-TOP 金=NOM NEG.EXT-PTCP  
 「私には金がない」
- b. *an tjuja teegee kani mutjun*  
*an tju=ja teegee kani mut-tur-n*  
 あの 人=TOP とても 金 持つ-PROG-PTCP  
 「あの人はとても金を持っている」

## 8.4 結合価を変える操作

主語は取り立て助詞が附属しない限り主格助詞で標示され、目的語は取り立て助詞が附属しない限り無標示である。本節では、これらの標示を変えるような操作（態転換）について述べる。

### 8.4.1 受動

受動化は、他動詞に受動の派生接辞 *-ar-* を付加することで一項動詞を派生する。また、以下のよう  
 に項の格標示を操作する。元の目的語は被動者として新しい主語になり、元の主語は与格で標示される。例えば、*maju=ja nizimi kam-tar-n* (猫=TOP 鼠 食う -PST-PTCP) 「猫が鼠を食べた」は、*nizimi=ja maju=nen kam-ar-tar-n* (鼠=TOP 猫=DAT 食う -PASS-PST-PTCP) 「鼠は猫に食べられた」のように受動化される。実際の談話における受動文ではしばしば動作主が現れないこともある。

また、自動詞が受動化される（被害受け身）こともある。自動詞の受動文では元の主語は与格で標示され、新しい名詞が主語として導入される。自動詞の受動文は与格主語から被動作主へのなんらかの被害が含意される。例えば、自動詞文の *ami=nu hur-tar-n* (雨=NOM 降る -PST-PTCP) 「雨が降った」は、*ami=nen hur-ar-tar-n* (雨=DAT 降る -PASS-PST-PTCP) 「雨に降られた」のように受動化される。

### 8.4.2 使役

使役文は、動詞語幹への使役接辞添加か補助動詞構文によって形成される。

使役接辞添加による使役文では、元の文の主語が与格で被使役者として標示され、新しい使役者の名詞が主語として導入される。元の文が他動詞文であれば、目的語はそのまま無標示である。例えば、非使役文の *uttu=nu hun jum-i* (弟=NOM 本 読む-INF) 「弟が本を読む」は、使役接辞添加によって *wan=ja*

*uttu=nen hun jum-as-i* (1SG=TOP 弟=DAT 本 読む-CAUS-INF) 「私は弟に本を読ませる」のように使役化される。

軽動詞構文においては(19a)のように軽動詞に使役接辞 *-as* が添加されるが、これは(19b)のように使役の補助動詞 *simir-* によって代替が可能である。

- (19) a. *mun kooima satjan*  
*mun koow-i=ma s-as-tar-n*  
 もの 食べる-INF=ADD する-CAUS-PST-PTCP  
 「ご飯を食べさせました」
- b. *hun jumima simitan*  
*hun jum-i=ma simir-tar-n*  
 本 読む-INF=ADD CAUS-PST-PTCP  
 「本を読ませました」

## 8.5 極性

肯定が無標の極性であって、否定は有形の標示を受ける。部分否定（ある S は P でない）は述部への否定の標示で示されるが、全称否定「どの S も P でない」は疑問詞と述部への否定の標示で示される。述部への否定の標示には、主動詞の語幹への否定接辞 *-ar-* の添加、軽動詞の語幹への否定接辞の添加、そして否定存在動詞の 3 種類の方法がある。動詞に助詞が後続しない場合には、主動詞への否定接辞添加が行われる（e.g. *kak-ar-n*（書く-NEG-PTCP））。表 14 に動詞、形容詞、名詞述語の否定の方略を示す。それぞれの述語の種類は、*kak-*「書く」、*aa*「赤い」、*wan=ja sinsii*「私は先生だ」で代表させる。全称否定の行では、「何も書かない」「何も赤くない」「誰も先生ではない」でそれぞれを例示する。表中の PTCL という表記は、何らかの取り立て助詞が後続することを示す。括弧に入れられたものは随意的であるが、括弧に入っていないものは必須である。したがって、例えば、*aa-ku neer-n* は文法的であるが、*kak-i s-ar-n* は非文である。全称否定における *=ma* は他の助詞に代替できない。

表 14 否定の方略

	動詞	形容詞	名詞述語
肯定文	<i>kak-jur-n</i> 「書く」	<i>aa-har-n</i> 「赤い」	<i>wan=ja sinsii</i> 「私は先生だ」
否定接辞 <i>-ar-</i>	<i>kak-ar-n</i> 「書かない」	-	-
存在動詞 <i>ar-</i> の否定	<i>kak-i ar-ar-n</i> 「書かない」	-	<i>wan=ja sinsii ar-ar-n</i> 「私は先生ではない」
否定存在動詞 <i>neer-</i>	-	<i>aa-ku neer-n</i> 「赤くない」	<i>wan=ja sinsii=ja neer-n</i> 「私は先生ではない」
軽動詞 <i>s-</i> の否定	<i>kak-i=ja s-ar-n</i> 「書きはしない」	-	-
全称否定	<i>nuu=ma kak-ar-n</i> 「何も書かない」	<i>nuu=ma aa-ku neer-n</i> 「何も赤くない」	<i>taru=ma sinsii=ja ar-ar-n</i> 「誰も先生ではない」

## 8.6 テンス, アスペクト, ムード

### 8.6.1 テンス

徳之島方言には過去と非過去のテンスがある。過去は過去の動詞派生接辞 *-tar-* か 中止形接辞 *-ti* によって標示される。これら 2 つの接辞は共起しない。動詞の屈折形のうち中止形, 焦点形, 連用形, 分詞形でのみテンスが標示され, 焦点形, 連用形, 分詞形では *-tar-* があると過去, ない場合は非過去のテンスになる。それ以外の屈折形は有形のテンス標示を受けず, テンスの解釈は形式ごとに異なる。焦点形以外の定動詞は未実現のイベントに言及するので, 常に非過去の解釈である。中止形が主節の述語として用いられた場合, その解釈は過去になるが, 中止形が従属節に用いられた場合にはテンス解釈はその主節の述語動詞のテンスに依存する。副動詞のテンス解釈は, 常に主節の動詞のテンスに依存する。

### 8.6.2 アスペクト

アスペクトは, 無標示, 完了 (過去の *-tar-* で標示される), 進行 (*-tur-*), 結果 (*-ar-*)<sup>18</sup> の 4 つが区別される。無標示の場合, 習慣相 (e.g., *icama un=nan wun* 「いつもそこにいる」) か完結相の解釈になる。

### 8.6.3 ムード

実現的ムードと非実現的ムードが区別される。焦点形以外の定動詞は非実現的ムードを示し, それ以外は実現的ムードを示す。非実現的ムードの述語はまだ起きていないか仮想の出来事について言及する。

## 8.7 情報構造とその形式化

主題は主題助詞 *=ja* によって標示される。主格助詞は主題助詞とは共起しない。焦点化された要素は, 焦点助詞 *=du* によって標示される。焦点助詞は主格助詞と共起できる。*=du* は, 焦点化された要素と対比されるものごとが話者によって想起される場合に出現する。

- (20) *mukasija*      *jangadu*      *hanmɛɛ*      *jatan*  
*mukasi=ja*      *jan=ga=du*      *hanmɛɛ*      *jar-tar-n*  
 昔=TOP      芋=NOM=FOC      食べ物      COP-PST-PTCP  
 「昔は芋だけがご飯だった」

(20) では, 色々な主食が想起される中, 芋以外の候補が排除されている。

<sup>18</sup> これらの形式の機能は語幹核の語彙的アスペクトによって変わる。アスペクト標示と語彙的アスペクトとの関係の検証は今後の課題であり, 本節では簡単な記述に留める。

## 9. 複文

### 9.1 節連結

#### 9.1.1 等位接続

節の等位接続は統語的に等しい節の並置によって行われる。等位接続文は動詞の連用形、中止形、分詞形に =*si*, =*naati* などの等位接続助詞が後続した句に主節が後続することで形成される。

#### 9.1.2 従属接続

節の従属接続は統語的に等しくない節の並置によって行われ、動詞の副動詞形や中止形からなる従属節に主節が後続することで文が形成される。

## 9.2 引用

引用節は引用助詞 =*tji* によって形成される。どのような語、句、文も引用助詞が後続することによって引用節を形成する。引用節は知覚動詞や「言う」などの動詞の補文として機能する (21)。

- (21) *arigatooja*                      *simagutjisi*                      *oboradaanitji*                      *jun*  
<*arigatoo*>=*ja*                      *simagutji*=*si*                      *oboradaani*=*tji*                      *iw-jur-n*  
ありがとう-TOP                      島口=INS                      ありがとう=QUOT                      言う-NPST-PTCP  
「『ありがとう』は徳之島方言でオボラダーニと言う」

## 9.3 いいさし

従属節は (22) に示すように主節を欠いたいいさし文として出現することがある。

- (22) *ugwasi natjikajaa*  
*ugwasi nar-ti=ka=jaa*  
そう なる-SEQ=COND=CFP  
「そうならばなあ...」

動詞の中止形 (-*ti*) は主節の述語として機能するが、これは元々いいさし文であったものが発達して主節の述語としての用法を得た可能性がある。

## 記号と略号の一覧

	文境界	INS	instrumental (具格)
1	first person (一人称)	INTERJ	interjection (間投詞)
ABL	ablative (奪格)	LOC	locative (処格)
ACC	accusative (対格)	NEG	negative (否定)
ADD	additive (累加)	NOM	nominative (主格)

ADNLZ	adnominalizer (連体化)	NPST	non-past (非過去)
ALL	allative (方向格)	PASS	passive (受動)
AUG	augmentative (指大辞)	PL	plural (複数)
CAUS	causative (使役)	PN	proper noun (固有名詞)
CFP	clause-final particle (節末助詞)	POT	potential (可能)
CNC	concessive (譲歩)	PROG	progressive (進行)
COM	comitative (共格)	PROH	prohibitive (禁止)
COND	conditional (条件)	PST	past (過去)
COP	copula (繫辞)	PTCL	particle (助詞)
CSL	causal (理由)	PTCP	participle (分詞形)
DAT	dative (与格)	PUR	purposive (目的)
DIM	diminutive (指小辞)	Q	question particle (疑問助詞)
EXT	existential (存在)	QUOT	quot (引用)
FN	formal noun (形式名詞)	RSL	resultative (結果)
FOC	focus (焦点)	SEQ	sequential (中止形)
GEN	genitive (属格)	SFP	sentence-final particle (文末助詞)
HORT	hortative (勧誘)	SG	singular (単数)
HSY	hearsay (伝聞)	STA	stative (状態)
IMP	imperative (命令)	TOP	topic (主題)
INF	infinitive (連用形)	VBLZ	verbalizer (動詞化)

### 参考文献

- 上村幸雄(1972)「琉球方言入門」『言語生活』251:20-37.
- 加藤幹治(2021)「奄美語徳之島亀津方言の7母音の実態：母音空間と口唇形状から見る弁別素性・音声実現・調音運動の関係」日本音声学会第35回大会. オンライン.
- 加藤幹治(近刊)「奄美語徳之島伊仙方言のモノローグ資料—ハマウリとミーバマクマシと天照大神の話—」『アジア・アフリカの言語と言語学』16.
- 崎村弘文(1983)「徳之島の方言-3-徳之島町亀津方言の実態」『鹿児島大学文科報告第1分冊哲学・倫理学・心理学・国文学・漢文学篇』17:1-19.
- 柴田武(1981)「琉球方言の特徴」日本放送協会編『全国方言資料第十巻琉球編 I』.東京：日本放送出版協会.17-55.
- 下地理則(2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』東京：岩波書店.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.
- 中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』東京：法政大学出版局.
- 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』東京：大修館書店.
- Kato, Kanji (forthcoming) Tokunoshima (Kagoshima, Northern Ryukyuan). In: Michinori Shimoji (ed.) *An Introduction to the Japonic languages: Grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages*. Ch2. Leiden: Brill.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archaeology of the Ryukyu islands. In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, structure, and use*, 13–37. Berlin/New

## 付録テキスト

この付録では東面縄集落の伊藤勝美氏によって 2017 年に語られたモノログ資料を提示する。資料は加藤（近刊）からの抜粋である。モノログの内容は天照大神に関する民話だが、本付録ではその前半の一部分を提示する。物語はこの後に徳之島の伝統行事であるハマウリとミーバクマシの起源の話になり、最後に熊襲という異民族を退治した話で終わる。

- (01) *mukasi monosugoka jii atamanoa n*  
*mukasi <monosugo>-ka <jii> atama=no ar-n*  
 昔 ものすごい-ADNLZ 良い 頭=NOM EXT-PTCP  
*wanrjokuno an samuraiga wutanbee*  
*<wanrjoku>=no ar-n <samurai>=ga wur-tar-n=bee*  
 腕力=NOM EXT-PTCP 侍=NOM EXT-PST-PTCP=HSY  
 「昔、ものすごくいい頭の、腕力のある、侍がいたらしい」

- (02) *usjattuja ama kumanan warumonono wuntjikara*  
*usjattu=ja ama kuma=nan <warumon>=no wur-n=tji=ka*  
 すると=CFP あそこ ここ=LOC 悪者=NOM EXT-PTCP=QUOT=ABL  
*sugu uma izi warumon.o taizi sii*  
*sugu uma ik-ti <warumon=o> taizi s-ti*  
 すぐ そこ 行く-SEQ 悪者=ACC 退治 する-SEQ  
 「そしたら、あちらこちらで悪者がいるといえはすぐまたそこへ行って悪者を退治し、」

- (03) *ka kundu mata cigi mata uri sjun atika*  
*ka kundu mata cigi mata uri s-jur-n ar-ti=ka*  
 COND 今度 また 次 また それ する-NPST-PTCP EXT-SEQ=COND  
*mata mukkonan warumonno wuntjikara*  
*mata mukko=nan <warumon>=no wur-n=tji=kara*  
 AGAIN むこう=LOC 悪者=NOM EXT-PTCP=QUOT=ABL  
*mata uri taizi siija maati nihon zenkoku*  
*mata uri <taizi> s-ti=ja maar-ti <nihon> <zenkoku>*

また それ 退治 する-SEQ=CFP 周る-SEQ 日本 全国

*maati akkjun tjunu wutan*

*maar-ti akk-jur-n tju=nu wur-tar-n*

周る-SEQ 歩く -NPST-PTCP 人=NOM EXT-PST-PTCP

「また『こういうことをする者がいる』といえば、また『むこうに悪者がいる』といえ  
ばそれを退治し、日本全国を周って歩いている人がいた」

(04) *uriga mata daimeega oosjan tjujo*

*uri=ga mata <daimee>=ga oosja-har-n tju=jo*

それは=NOM また 題名=NOM 変-VBLZ-PTCP 人=SFP

「それがまた名前が変な人だよ」

(05) *un tjunu naaja amaterasuomikamitji waki*

*un tju=nu naa=ja amaterasuomikami=tji waki*

その 人=GEN 名前=TOP 天照大神=QUOT FN

「その人の名前は天照大神というわけ」

(06) *uri uma hansjarikatjo*

*uri uma hansjari=kara=tjo*

それ そこ 祖母=ABL=SFP

「それ、そこ、祖母からでしょう」<sup>19</sup>

(07) *usjattu kunduja mukasija gunjaka huniga*

*usjattu kundu=ja mukasi=ja gunja-ka huni=ga*

そして 今度=TOP 昔=TOP 小さい-ADNLZ 船=NOM

*gunjaka mungwanaatija*

*gunja-ka mun-gwa=naati=ja*

小さい-ADNLZ もの-DIM=CSL=CFP

「そして次、昔は船は小さかったから」

(08) *gunjaka hunigwanaati ugwasi kikaija*

*gunja-ka huni-gwa=naati ugwasi <kikai>=ja*

<sup>19</sup> この文脈におけるこの文の意味は不明である。

小さい-ADNLZ 船-DIM=CSL INTERJ 機械=TOP

*neeran*

neer-ar-n

NEG.EXT-NEG-PTCP

「小さい船だから、そう、機械はないよね」

- (09) *kaisi kuzidu akkijasaja*  
<kai>=si kug-ti=du akk-i=ja=sa=ja  
權=INS 漕ぐ-SEQ=FOC 歩く-INF=CFP=SFP=SFP

「權でこいでこそ航海していた」

- (10) *cikjaka tooja kaisi kugarjusiga*  
cikja-ka too=ja <kai>=si kug-ar-jur-siga  
近い-ADNLZ 所=TOP 權=INS 漕ぐ-POT-NPST-CNC

「近い所は權で漕げるけど」

- (11) *jamatukan watarjuntji natikara kjoriga*  
jamatu=kan watar-jur-n=tji nar-ti=kara <kjori>=ga  
大和=ALL 渡る-NPST-PTCP=QUOT なる-SEQ=ABL 距離=NOM  
*tuuwan munnaati zenzen tairjokutekini ugattoo*  
tuu-har-n mun=naati <zenzen> <tairjoku-teki>=ni ugattoo  
遠い-VBLZ-PTCP FN=CSL 全然 体力-SEQ=DAT そちら  
*kugjuntjima saaransaja*  
kug-jur-n=tji=ma sa-ar-ar-n=sa=ja  
漕ぐ-NPST-PTCP=QUOT=ADD する-POT-NEG-PTCP=SFP=SFP

「大和（日本本土）へ渡るとなったら、距離が遠いので、体力的にそちらへ行くというのは全然できないよね」